

新潟農業振興支援キャンペーン「水利が拓く 実りの明日へ」 Vol.10 新川流域

新潟の土地改良事業や水利施設、生産者の取り組みを紹介する「水利が拓く実りの明日へ」キャンペーン。
5年目となる今年は大学生に加えて一般公募者も参加。
「水利ゼミ」として水利施設や農業について学んでいきます。



農地を保全し、暮らしを守る

新川河口自然排水樋門のそばで話を聞く参加者。左岸に当たる右手は川を一部締め切って工事中



今回の参加者。前列右から、池田弘毅さん、田上慧華さん（いずれも新潟大学・農学部農学科 施設機能工学専攻・4年）、鈴木紗耶香さん（新潟食料農業大学・食料産業学部 食料産業学科・ビジネスコース・4年）、小林杏楓さん（新潟食料農業大学・食料産業学部 食料産業学科・アグリコース・4年）、後列右から種村政夫さん、佐知子さん夫妻（南魚沼市）、石附智子さん（新潟市西区）

まだ暑さの残る8月下旬、第2回目の水利ゼミが行われた。バスの中では、これから訪れる地域の歴史について北陸農政局職員から話がいった。千年前の絵図を見たことがありますが、西蒲原地区から長岡、三条、燕に至る日本海沿岸は海の中。河川からの土砂が堆積して平野が生まれ、農業が営まれるようになりました。ただし、西蒲原地区における3分の1の土地は海抜マイナス1.5メートルから1メートルで、農作業は腰まで水に浸かりながら行われていた時代もあったという。「排水」設備が造られてようやく、農業が促進され、現在のような田園風景が生まれた。

「あそこにも水路が走っていますね。職員の言葉に、公募で参加した南魚沼市の種村佐知子さんは驚きの表情を見せた。「これまで、水が流れているところはひとつくりに「川」と考えていました。用水路もあれば排水路もあるんですね。そんな水の流れをめぐる今回の水利ゼミ。一行は新川河口排水機場（新潟市西区）に到着し見学が始まった。

まずは老朽化した樋門（ゲート）の更新工事の現場へ。仮設階段を降りて川底に立った参加者たちは少し興奮気味。「海が高いところに見える。工事は右岸と左岸に分け、樋門の機能を維持しながら施設を更新すると聞き、「合理的」との感想が聞かれた。

中越地区とは違う土地の歴史を感じた

新潟の海側に住んだことがなかったの、海拔の低い場所だとどのようなことが起こるのか、何が必要になるかを知ることができ、とても面白かった。

.....

農業に期待 若い社員が活躍する

.....

地域を知ったことで 愛着が深くなった

施設更新の現場や 工夫に発見があった

.....

水害の歴史学び 排水の重要性を認識

小林 杏楓さん
Issa Kobayashi
新潟食料農業大学 食料産業学部食料産業学科 アグリコース 4年

田上 慧華さん Keika Tagami
新潟大学 農学部農学科 施設機能工学専攻 4年

池田 弘毅さん
Koki Ikeda
新潟大学 農学部農学科 施設機能工学専攻 4年

種村 政夫さん
Masao Tanemura
南魚沼市

石附 智子さん
Satoko Ishizuki
新潟市西区

種村 佐知子さん
Sachiko Tanemura
南魚沼市

鈴木 紗耶香さん Sayaka Suzuki
新潟食料農業大学 食料産業学部食料産業学科 ビジネスコース 4年

水利ゼミ
WATER SEMINAR

更新される水利施設と農業を訪ねて

感じたこと、考えたこと

川底に行くことはなかなかできないので貴重な経験となった。新川の国営事業が水害をきっかけに始まったと知ることができ、学びとなった。

生まれ育った場所ではかつて、「水争い」があったと聞いたことがある。今回、水害の歴史を学び、新潟の沿岸地区においては排水が非常に重要であることを知った。

水利施設や水路の整備、多くの方の管理のおかげで、食と暮らしが守られていることを改めて実感した。あたりまえではないことに感謝し、保育士として子どもたちにも伝えていきたい。

県内各地の事業所から

加治川二期農業水利事業所

国営加治川用水土地改良事業は、平成24年度の着手から14年目を迎える本年度末に完了し、事業所は閉所します。この事業では、今から約50年前の昭和49年度までに国営加治川土地改良事業で建設したダム、頭首工、用水路の老朽化対策として施設の更新等を行うとともに、水稻の作付け品種が早生からコシヒカリに代表される中生に変化したことによる夏場の用水需要の増加に対応するための水源施設の新設等を実施しました（写真の左手前は更新した用水路、奥は新設した水源施設、広がる農地は国営事業の関連工事で新潟県が整備）。



国と新潟県による工事が完了した水田地帯

関川用水土地改良建設事業所

本地区では、国営関川土地改良事業（昭和43年～昭和58年度）で造成した施設の改修を中心に平成26年から事業を開始し、取水ゲートやコンクリート施設の改修、整備、管理費用の軽減を目的とした小水力発電施設の整備等を行ってきました。

着工以来、12年の歳月をかけた事業も、今年度で無事完了の運びとなります。地元受益者の皆様には、長い歴史の中で形を変えながら守り継がれてきた農業用水、本事業により整備した施設を未永く活用いただければと思います。これまで県民の皆様の御理解、御協力により事業完了を迎えられることに感謝するとともに、今後も地域の農業関係の活動を暖かく見守っていただけると幸いです。



笹ヶ峰ダム



「水利が拓く 実りの明日へ」キャンペーン事務局
（新潟日報社ビジネス局内）新潟市中央区万代3-1-1

●TEL 025-385-7432（土日祝日を除く／10:00～17:00） ●ファクス 025-385-7438 ●Eメール minori@niigata-nippo.co.jp
| 主催 | 農林水産省北陸農政局 | 共催 | 新潟日報社 | 後援 | 新潟県、新潟県土地改良事業団体連合会、新潟県農業協同組合中央会

●キャンペーン 特設サイト
水利が拓く 実りの明日へ 検索

過去の紙面もご覧いただけます





コンバインに乗り稲刈りを体験する参加者



ル・レクチュの果樹圖で説明をする児玉智志さん



盈科代表の児玉智志さんの話を聞く参加者



右岸の樋門は更新工事が令和5年に完了。同じものを左岸にも建設中



新川河口排水機場の中でポンプの入った鉄の筒を見下ろす参加者



1台毎秒40トン 大型ポンプで排水

「これがポンプに装着されている羽根車です」。新川河口排水機場内に移動し、担当者から排水の仕組みについて説明を聞いた。羽根車の直径は4メートル20センチ。毎秒40トンの水を排水するポンプは6台あり、普段は自然流水だが、雨が降るとポンプを稼働させて強制的に排水するという。近くにある新潟大学に通う池田弘毅さんは「砂丘にある大学を下の海抜0メートル地帯。日本最大級というこの大型ポンプによって守られていることが分り納得した」と話す。続けて地下に降り、ポンプの本体を上から見学。「あの鋼鉄の円筒の中に羽根車が入っています。今年の8月10日と11日には5台を稼働させました」。ポンプの巨大さを前に、参加者は排水の重要性を実感していた。

20代が活躍する農業に未来を見る

次に向かったのは、排水施設の受益地である、新潟市南区の農業法人盈科。稲刈り直前の田んぼの前で、代表の児玉智志さんから話を聞いた。110ヘクタールのコメを中心に大豆やル・レクチュを栽培し、スタッフ15人のうち8人が20代だという。「どんな若い人を採用しながら圃場管理する人材を育て

たい」。同法人の圃場は分散し、それぞれに条件が違ってくる。作業計画を作成して実行できる管理者の育成が重要という。「最初は教えるものの、その後は判断も任せるというやり方は将来を見据えていると思った」と小林恵華さん。最近、就活を経験した鈴木紗耶香さんは「若手でも、新しい発想など法人に影響を与えることはできる。これからの活躍に期待したい」と来年から社会に出る自分を重ねていた。「お米や大豆はどこに卸しているんですか？」との質問に児玉さんは「JAです」と回答。「より良いものをたくさん作りたい。それを一般流通に乗せて、安定した価格で消費者に届けたい」と続けた。田上慧華さんは「産直市場に卸したり、ブランド化や6次産業化で収入を増やしたりする動きがある中で、安定提供を優先するという考えに驚き、共感した」と述べた。

続けて果樹園に移動し、ル・レクチュの棚を見学。毎朝晩、水路から引き揚げた水をスプリンクラーで散水しているという。「ル・レクチュは作業時期が米と重ならないので、並行栽培に好都合。『育ててみたい』と若手に来てもらうきっかけにもなっている」。そもそも盈科とは「流れる水がくぼみを満たして先に流れる」を意味する孟子の言葉。「一つ一つ解決して先に進み、日々より良い農産物を作る」。児玉さんらの姿と言葉に、農業を未来につないでいく意志を見た一行だった。

水を制して、未来を拓く。



栽培から販売まで。 学生主体の産直市場

昼食を挟んで、同じく排水施設の受益地内に位置する新潟県農業大学校（新潟市西蒲区）の農産物直売所「情熱市場」を訪れた。実習で育てた野菜や果物、花を学生自ら販売している。並ぶ野菜の豊富さと安さに驚きつつ、学生店長と副店長の説明に耳を傾けた。「おすめは、かつて西蒲区で栽培されていた越後白ナス。焼いても味噌汁に入れてもいいですよ」。白ナス料理を学祭の屋台で販売したことがあるという小林さんは「傷つきやすいのに、形も表面もきれいですね」と感心した様子。池田さんは「自分たちで育てたからこそ伝えられるメッセージがある。だからこそ盛況につながっているのではないかと話した。育てる品種の選定について質問が上がると「基本は学生が作りたいもの。ほかに園芸試験場から種をもらい、試験的に栽培するものもあります」と教員が答えた。農学部に所属する田上慧華さんは「試験場のような役割を果たしつつ学生の経験にもなる。同じ農業を掲げていても大学との違いを感じた。それぞれの長所を今後に生かせるといい」と話した。

水と土の歴史に学ぶ 水利の大切さ

最後は西蒲原土地改良区（新潟市西蒲区）を訪れ、西蒲原地区の歴史や成り立ちを学んだ。昔は「悪水」と呼ばれる溜まり水のために3年に一度しかいコメが作れなかった。それを克服すべく排水施設や水路が整備され、コメどころと呼ばれるようになり、農地を保全するとともに、住宅地を含め暮らしを守っている。「1回目に訪れた中越地区（の用水施設）とはまた違った意味で、水利施設の重要性を考えさせられた」と小林さん。続けて操作室を見学し、参加者は巨大なモニターに釘付けに。西蒲原地区の農業水利施設すべてを監視しコントロールしているという。「施設やポンプそれぞれに数値や色分けがされ、一目で分かるようになっている。共有しやすいと感じた」と鈴木さん。南魚沼市の種村政夫さんは「3人で24時間体制を取っていると知り、毎日が水害対策だと思った。感謝しかない」と話した。

新潟市西区に住み「地域のことを知りたい」と参加した石附智子さんは「水利施設によって私たちの暮らしが守られていること、この地域の豊かな農作物が育まれていることを知り、自分の住む地域への愛着が深くなった」と一日を振り返った。「水」という視点で地域を見直すと、日々の暮らしでは見えなかった景色が見えてくる。排水の大切さ、未来へつなぐことの重要性を、参加者一人一人が自らと関係づけ、自分事として持ち帰った。



中央管理所では排水機場やゲートを一元管理。10枚のモニターには水位やポンプの稼働状態が転送されている



「悪水」を克服した地域の歴史を動画で学ぶ参加者



西蒲原土地改良区に展示されている、水と土の歴史を伝えるパネル



自慢の農産物や花を手にする学生店長（左）と副店長（右）



学生が生産から販売までを行うと聞いて興味津々の参加者



工事中の川底に降りて話を聞く参加者。後ろには工事中の樋門



学生が自ら栽培した商品を販売する「情熱市場」